

# 馬を利用して自然保護と社会教育事業

## 旭川市 NPO 法人ネイティブクラーク

「みんなが使っている川、今日はその川をきれいにしましょう。そうしたら、ご褒美として、ここに来ている馬に乗せてあげますからね」

NPO 法人ネイティブクラーク代表の小野塚充男さん（通称クラークさん）が、旭川市の小学5年生の児童たち11人の前で、馬を指差した。クラークさんは、テングロンハットにジーンズ、ブーツ姿。若々しく、とても65歳とは思えない。子供たちは、クラークさんと馬を交互に見つめながら、嬉しそうな声を上げた。

2013年10月15日、旭川市街を流れる石狩川の河川敷。早朝に降った雨がようやく上がり、薄曇りの肌寒い日であった。クラークさんを含め、ネイティブクラークのスタッフ合計7人が手伝いに来ている。そのスタッフに引かれている3頭の馬は、河岸の草を食べている。子供たちは、軍手をはめてカップやウインドブレーカーを着込んでいた。

「では、ここから、あの橋の所までのゴミを拾いましょう」

スタッフが、指示する。

子供たちは、それぞれに大きなビニール袋を手にして、歩き出す。どんなゴミが多く捨てられているのかも学習する。

「タバコの吸い殻を、また見つけたよ」、「空

き缶もあるね」などとの子供たちの声が響いてきていた。



不法投棄されたゴミについて、写真を使い児童たちに説明するスタッフ

作業が終わり、集めたゴミを前にして、スタッフが説明する。

大きく引き延ばした写真や画用紙に描かれた絵を掲げて、紙芝居でも見せるかのように語りかける。写真には、不法投棄された家庭ゴミや、廃棄された家電製品、自転車などもある。

「どうして、川べりにテレビが落ちているのかな？」

その問いかけに、子供たちは手を上げて答える。

「大人はずるいから」

「ゴミを捨てるのにお金がかかるから」

「川は広いから少しぐらいなら平気だから」

「では……」と、スタッフは再び子供たちに疑問を投げかける。

「では、川は、みんなの飲み水にもなって

いるのに、ゴミが捨てられるのはどうしてでしょう？」



児童たちに向かって川の大切さを説明するクラークさん

### ■ 自然への恩返しでゴミ拾いを

子供たちとスタッフのやりとりを真剣に見つめていたクラークさんに、尋ねてみた。

「どうして、このような活動を始めたのですか？」

この質問にクラークさんは、テンガロンハットに手をやり、川を見つめながら答えた。

「河川も山も、使わせてもらっているの、その恩返しのつもりで、ゴミ拾いをやろうと思ったのです」

馬を使う理由については、河岸だと馬に乗ってゴミを拾った方が、やりやすいと考えたから。視点が高いとゴミを見つけやすい、川の中州でも簡単に入っていける。最初は馬に乗りながら長いトングを使って、ゴミを集めていたという。

「それが、子供たちにも乗せてあげれば……となり、ご褒美に乗馬してもらおう、といった今の形式になったのです」

そう語りながら、再び川の流れに目を

向ける。

東京生まれのクラークさんは、自衛隊員や教材販売会社経営など様々な仕事を経て、1996年に旭川市郊外の原野を購入、自然に囲まれた豊かな生活を求めてホースガーデン（観光牧場）をスタートさせた。

「ホースガーデンは、観光牧場であるが、観光地ではない」というのがクラークさんの信条でもある。観光バスが入るような駐車場は作らず、建物も古い農家を改築したり、廃材を使ったりして、みなスタッフの手作りで牧場を完成させた。

開拓時代のアメリカのような独特な雰囲気のある牧場で、カフェや革製品のクラフト工房も設けられている。そこでは、スタッフや従業員も、本名は使わずカタカナの通称で呼び合っているという。こうした取り組みが認められて、旭川観光協会の観光顕功賞も受賞している。

### ■ 乗馬仲間 13 人でNPO法人設立

ホースガーデンという基盤があったからこそ、馬を利用して自然保護に取り組む、といった活動に行き着いたという。

2003年、自然保護と保全運動を目的に、乗馬仲間 13 人でNPO法人ネイティブクラークを設立させた。翌年、「森林愛護騎馬隊」として上川南部森づくりセンターから認められ、山火事注意の喚起やゴミの不法投棄パトロールなどを実施。2005年には、「河川愛護騎馬隊」として旭川河川事務所より任命されたことから、名称を「大雪愛護騎馬隊」に統一。地域の環境保護運動に加え、馬を利用とした社会教育事業を展開

した。こうした事業の一環として、小学生を対象にした河川敷のゴミ拾いも年数回行っている。

その他、旭川近郊の親子を対象とした「センス・オブ・ワンダー」も開校している。この事業は、農林水産省の支援事業。親と共に自然の中に出かけ、自然の魅力や不思議に触れ、子供の感性を豊かにして親子の絆を深めるといった活動である。

また、市民を対象に、馬の文化や生態についてわかりやすく解説する文化講座「馬学入門講座」を開催し、生涯学習の機会を提供するとともに、自然保護を訴えている。

現在、NPO法人の中心メンバーは5人。さらに、ボランティアスタッフとして十数人が登録されている。活動ごとにメールで呼びかけ、参加できる登録メンバーが現場にかけつけるといったシステムだ。活動費は、寄付金や会費、助成金で賄われている。これまで、河川愛護活動事業（河川環境財団）や農村振興景観パイロット事業（農林水産省）、青少年育成事業（JT）などから助成を得ている。

### ■ 動物とふれ合い、自然と向き合う

「では、実際に馬に乗みましょう」

ゴミについての勉強の後は、お楽しみの乗馬である。子供たちが一斉に馬のそばに走り出すと、クラークさんが小声で話してくれた。

「だいたい、1人ぐらいいは、馬に乗りたいって、拗ねる子供がいるのだけど…その子供をいかに馬に乗せて楽しませてあげるかがポイントだね」

その言葉どおり、一人だけ馬に近づかない男の子がいる。クラークさんは彼の肩を叩きながら励ます。

「一番大人しい馬を選んであげるから、大丈夫だよ」



嬉しそうに馬にまたがる児童たち

子供たちを順番に一人ずつ乗せ、スタッフが馬を引く。河川敷の草むらをゆっくりと一周する。一人あたり3~4分と短い時間だが、子供たちは初めての体験に興奮していた。

「ちょっと怖かったけど、めっちゃ楽しい」

「超、可愛い」

「もっと馬に乗りたい」

乗馬体験をもっとやりたいという子供が、クラークさんの牧場がどこにあるかを聞いてくるほどであった。拗ねていた男の子も、頬を紅潮させながら馬にまたがっていた。

引率の高田秀人教諭は、「この活動の前に、授業で川についての学習や、水質調査なども行っていますので、河川について興味を持ってもらえenと思います。児童たちは馬に乗れるのが嬉しいですし、川の勉強

にもなります」と語る。



動物とのふれ合いが大事だと語るクラークさん

コーディネイトを担当しているボランティアスタッフの女性は、「子供たちに『川の町、旭川』を知ってもらいたいのです。そばに、自然の教材があるのですから、もっと川を取り巻く状況を分かって欲しいのです」と、その思いを話してくれた。

最後に、クラークさんは、子供たちに向かって話す。

「馬に感謝の気持ちで、草を摘んできて食べさせてあげて。草はクローバーが好きかな。とくに4つ葉のクローバね。馬は、言葉がなくても人間の気持ちが分かるから。心を込めて草を食べさせてあげて」

クラークさんは、馬の背をゆっくりと撫でる。子供たちに動物と触れ合うこと、自然と向き合うことの大切さを教えていた。



■ 連絡先

〒078-8204 旭川市東旭川町桜岡 160-4

NPO 法人ネイティブクラーク

代表 小野塚 充 男

TEL/FAX : 0166-36-5963

E-Mail : info@nativeclark.org

URL : <http://www11.ocn.ne.jp/~clark/sow/>